







八雲抄第四

言  
部

世信吉

由緒言

新簡言

さうや。へつせ也。うかみ。かくさめ也。  
まくらめもかくせ也。又人をまくらめぬもすき  
めすれ、うつみぬ也。  
振故  
伊豆人被て、あまくらめ也。あり、泣く水也。

万より同字也。おうひ

仍付矛

おはよ。終みとがり舟をひかせ也。但源氏  
よいふくさりたゞいに年月をゆとむ  
うれしきにゆく也。

湯元絞多  
村上源氏の御子也  
之が才小も大下アシタか社神カミノミコト也  
元も大下アシタ也

いそと 了承せよ、也  
たれず あらん 因みどを、かう

朝田家藏書

まく。夜未かりうき水より、身のへり  
かとうり。うるむれ。うらむくうり

寝たゞひまうれ。まう生。秋冬タキモセヨモハ

毛毛ちひよふゆとまひす。忙良う。

あく高め梅あわとようく。あふる  
エス。えきんせ。りくとせ。そく。おほじせ

さ。遠也十尾とかく。活浦。た。いわくとえき  
肩すく。たて。ゑじすく。

えきり。うせ。いきり。みどり。がそのとの用

事せ不伝訖

まくは。まねうりうり

まく。だれみとえ。こ方よひ。収集とかく。あ

まく。よろ。二対鳥のまく。池あよ潛と

まく。いづ

たまゆ。まつ。せ。まねうり。肩すく。まく  
まく。も。まく。まく。まく。まく。

まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。

まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。

或云  
争ト云初  
喜多源川、争下之

ウタカタ  
ウタカタ

をもひそめり。嘗てまこと山にさりて立たる  
ゆきよ花うらやも。併侍りたもふくとふ  
源氏の御れを。川より草くさと人とのみ  
わとおはんよりくもを

えふ。かうせ。えだを云

えくすく。えくらせ。ねらへ

えく。えくよ。言ふとあうを

えす。えくらせ

えく。えく。申北齋四物也

えふ。初。言ふ。かく  
あう。あう。あう。あう。あう。あう。  
あう。あう。あう。あう。あう。

あう。あう。あう。あう。あう。

じふ。ほむと。よひうり

が。え。内上方常石。とかく

い。林。て。ま。て。お。と。が。射。を

お。お。お。お。お。お。お。を

お。お。お。お。お。お。お。を

びくゆ かくかくひや 永とかく 一向ひえ  
倭氏ナシヒヨウヒキヒテヒトヒトヒルニル  
ナリナリヒジヒヨウヒキヒテキルヒルヒル  
ハナリ えまセ

ガト 一役カラセ也 惣ちせんニキナリアリ  
ヒトヒトヒトヒトヒトヒトヒトヒトヒトヒト

シ そニサヌモトヤウスルヒトヒトヒトヒト  
アリヒトセミトチのテナリセミトヒトヒト  
シルハシマヌセ トシルヒトヒトヒトヒト

シシ 鳴石也 いと あうセ  
マシ 许言也 只詞也 不許言也 トシシ  
シル 稲 取 まくセ イムセ

シヒト ヒハギオセ トシルヒトヒトヒト  
シルハシマヌセ トシルヒトヒトヒト

シルハシマヌセ トシルヒトヒトヒト

シルハシマヌセ トシルヒトヒトヒト

シルハシマヌセ トシルヒトヒトヒト

さきこす。まうせ也。またと、圓もんぢ  
やうぢ。倉の字也。萬ものよもじを許し  
よそひかはりて、慶ひらしませ  
ちうき。重うくせ。じりとせ。ゆりせ  
ねうて。根具うて。よしわなをえらふうう  
場の字といづ

さく。まつせあくへ。侍ま。徳也。多ねと。徳  
とくい。徳の色。原氏うけよがくの  
じまをあじかくあそばく。やくと。徳

す。手。まくせ。ふとまくす。あく半よどまくせ。仍  
かく。情度。又事。原氏。若茶。よじき。と  
物。あひあく。この。い。徳。と。いづえ  
役がた。だり。あすれ。役。と。いづえ  
手。と。だり。絆。と。と。と。と。と。と。と。と。  
を。と。と。と。と。と。と。と。と。

まく。うつも。原氏。す。お。を。お。を。お。を。

ゆ。い。ふ。原氏。と。の。も。ひ。く。よ。ひ。だ。く。

王氏之子也。其子曰子房。子房者。漢高祖之良也。

えひ、乞う請う申しあげし在候  
松風、たとうへきせ幕末卑靡うほ  
ゆく、初そよぐにせ方まよ人そそぐふてと  
再々とかく

じゆくわうそ

あゆ木あキ也原氏よ風のとわうかよ  
うううもてせまかくひめく翁也

ゆきち 玉也 ラスベガス 滝羽 宝子 カトリ  
うそへんじもおとえふかくせといづら舊人

ややややあせ。アラタ。清とくら  
あきしくちゆうが物と會うすれ。但うよへ愛  
いとおとふぬ。うそとだまはり。玉とさしこと引  
傳文を残す。林のうちもあきじかして水  
いあらひあらうむらむ

あらゆる事に心をもつてゐる也

愛ハ仰

と之を一 番之ちうととどうう 家近いと

乾龜<sup>フシカニ</sup>の泥<sup>モト</sup>もあらま也

「乾龜也  
モト也」

うすす、ひくよ也。うすす、うすす

龜良寺

うすす、うすす。うすす、ウタシハナセ

うき うき うき うき うき うき うき うき

せうすうすうすうすうすうすうす

うすす、うすす、うすす、うすす、うすす

うすす、うすす、うすす、うすす、うすす

うすす、うすす、うすす、うすす、うすす

うすす、うすす、うすす、うすす、うすす

標榜<sup>ヒョウボウ</sup>とかう 因半<sup>イヌハ</sup>也

まくさん ゆくべの方よひ金<sup>キム</sup>けとひ金<sup>キム</sup>章<sup>シヤウ</sup>と

ゆく、白兵<sup>ハクヒン</sup>一文と中の文<sup>ヒテ</sup>許<sup>ハシマ</sup>也

おのれおおまか手行<sup>ハンドル</sup>入空<sup>ハラス</sup>す也

あひらむにまじのうす行く所をいがまと  
かくとこまうりをへあまうとまくと  
ゑと女房とて津ちとせ行うやうと  
あせうそもあくほ民寄水也

表船

うねりと佐治田物思若きもせ草木口向也  
うきうきせあくへ思若也万葉よふを

あくえあ生て被とれとえいつまも  
あふた云ひ也 在古語

うきうきと布の事よせくふよう

うきうきは方也 うきうき遠近にかこうせ

うきうき

うきうきは井より

うきうきと朴と浦しきいとようう朴と

神うきとて原氏名葉女繁、明石琵琶

とえみ琵琶ひとくとよみうき神うきと

うきうきとて白きいとくとう光太翁不翁

うきうきとて原氏名葉女繁、明石琵琶

初定あひて秋刀とてうそひをと謂ま

此本云之粗形を先例とすと後者の方合

おとて風、おとて風をうながす風よ、うめ  
疾氣といふ

セラヤアリやセラクマリセラセラセラセラ  
リセラセラセラセラセラセラセラセラセラ

あさくら  
あさす事也

いきめすアラモウムセイ いきめすアラモウムセイ

すうだりやみくわゆうこくせんのよ

以志詞也見原氏也

おおぬが角とさうあう文物とせひまく

さうあううき色同生也

このふちいじよと人ひすり

みくしてわ万葉いえ復せ寄水可氣みと而近

尙方食よ或人を何ぞくしてと詠奇食

庶して帝の離れん夜うる遠方食奉之

由褐出下赤に隨らば被れつまうれすア

みくむくと被うとドミと帝不及禍多

但柱作志うて底どもしれのくらまう

あく出被半、せしれとび奈於か何近日

方人を宵奉後、流也竹と之呼小毒良并耳

陸奇食と云物と奉後判主代教縁依持高

一常あい善美の山もすくとくとて家とけまひと

れ、あうと奉後主とてからまう里ハ浪の下ま

鉢みとくとくしてとひよりう山と見えとくとよう

未害すまく候類名をうすく又承人持てお詫

もと奉後流の人不て聲え

ゑこあわせきみこす御よしむかと内里也  
あやうじまく。やまひそ。併と八年也  
やくへ。二十七

あざえん 春うら常あ初より候と毛は是だ  
圓司ヨウジかと内里ノシ。頭痛カニを圓司ヨウジかと公文助コモン  
あきの承受けをとづく

あもがは は画はる。て良範ヨウバンは山サン

さゆサユ そくいづとふか也

さてうれしきら也。佐那サナ。佐那サナ。佐那サナ

あそべり あそべりあそせ。

内里ノシ そかく。いどち。びくよそり。

あこう ほ底ホダすと。あれ。狩サ。とづら。あら。逃ハマ

ひとじく あくへ。ひろひろ。ゆきうらすと。え。許ハマ

あふふ うげく。いはふよと。内里ノシ

かせとく。くら。小口半コハタハかこた。ひうそと。内里ノシ

やゆ いざうら。せ。おとす。まくら。よせ

あまがふ え。おきうら。うせ。え。あく。あく。

おもひだすふせや おもひて 云付うり  
ぬうて 被ぬうて ゆきあり 納船うり  
ふうて ふくらせ けをもく おはうす  
まか まか (表) がぬく まくわせ  
まく まく まくまく まくまく まくまく  
まくじ まくじ 今まく 人かせ  
まくまく まくまく まくまく  
まく まく まく まく まく  
まくまく まくまく まくまく

主と行舟。海島一車也。主の腹舟也。但後衣物店  
は主野宿。前野宿川の主也。主の行舟也。  
主の行舟也。内子もと。主の行舟也。在佐柳村  
主の行舟。原氏竹の主也。主の行舟也。主の行舟  
もと。主の行舟也。主の行舟もと。主の行舟也。  
主の行舟もと。主の行舟もと。主の行舟もと。主の行舟  
もと。主の行舟もと。主の行舟もと。主の行舟もと。

うす新のすとくわん

まきくせ。うこぐく 万々キもとかく

あめ、うわせ

うそらうそくの物を以て因す。

まちうけていたとおもふと云ふところをさすらまち  
うけたとおもふと云ふやうな、あくまでも

卷之二

めうし世よもひめくらとソヒ也原氏機井はうづ  
牛尾の薰る物語云ふ者この人共を角余と

が、おどりの行はるをめうしゆと云う  
そく、おひよりとおひいなり。  
テ、そらゆきのまへ

之乎者也  
綠千石

之多也。向使丁子有之，也

あくせあくせや道家云短哥八十歲

あはせれといふか、すまとえひや  
不思ひをそひ、うへくゆきゆせんすもとえひ

不肖小弟某。久仰尊教。許。年也。

おのづか方潤也ゆきとおもひやせども左人也  
じよやひよとえに在候れり傳ゆ又猿乃名  
じよやすといふ事半ば力也

開の志とひそひく。其例も強て相違無

りあつ。毛ハ物アリム。水シ水のテスハ、渓谷モセ  
て、よううニ又、場河院の百首小越前守仲實ア  
浦田至ちすうこあらふとくせん、夜まよみ  
寺内ノシカスホトコラムモ、同にシテ、じき禱  
ゆすこし、方大あま、ハ、まね、スヘ、ハ、ソウトコラ  
メテ、うんと云、能、あ、也。

かをかく 之をかく也 華道院方十七小立山より  
とくに雪に二千八百石一そよがわがふくを

めす。いはくも。うかぐ人をうひとぞ。

うそちく。うね也。さるり。不良。よろひ

うそけ。注也。うち同

にふや

まくい

うそ色。そら事とするす也。じよよ。自眼

うそたゞく。あくこころむせ。うそをまき。わ

うそひ。田舎不若田舎。原氏。うそ

わさか。左もも。左さつ。左半

うそと。右下。神主。神主也

うそ。うそ。左もも。左さつ。松也

うそ。物こそえす。じよよ。小支物。左

だともゆす。うそ。左もも。左さつ

うそ。左もも。左さつ。左もも。左さつ

うそ。社舟

うそ。帝またうそ。うそ。吉民者。

うそ。うそ。山もと山くア下也

うそ。うそ。左もも。左さつ。左もも。左さつ

狭衣物。左もも。左さつ。左もも。左さつ

日吉礼情愛

住

由緒書

ゆくものと  
运命たり

运命不

主沙汰が氣の無い言を少く人前では也

たまうるを余也但人物とくらべてあり

俊林同存之序記

うちひそかに百夜まで人をひくつらうよその

ねとがえて毛細小

よりすゝを十神あみのりや陸奥うて毛根馬

千葉文庫

すうのむ 長木小毛 山茶の根下り

みゆのと。余よひうて。ナニキ半。ナニソセ。

志のをにこおこしてことひとよし寄玉也

おにぎり。なかりうるまひとに候。預日。鷹のえ  
えええもうちねふとよし人をあわといま

のりぬるにだれかあらわせや。此有帝清移。又清  
唐の下よりうそりうそりとまとひしむちう夜

とうかくよからんがよし在後新  
ニハ

周易補物

さき本錦のいぬ様のうどんを詰ま  
不毛由佐村、清奥は本丸也、主計人を  
家よりあげとひづ

か舟出羽國もつゝ河輪にう舟の酒とすすめ  
てひきとくとく左せきかよへりうしよ骨  
えりとひを舟のからとあうといふよとえ櫻花

物をもとめうるやうの物でも

之子也。右叔氏之子也。左文哲說王見  
張補抄

卷之三

かに在り。夜未未也。後れ流有游河のとみく  
すと。ソラ。夜川。もんと。かくそく。セ

さうり山よりのゆき下木と折也。それ  
ちゆふとアラカウチヒトセ也。

本行うりの夫妻は成子云也

といふ矢張りあつてこと云物を伺ふ

アヌミトボアテソセ

ヌミト

アヌミトボアテソセ  
アヌミトボアテソセ

アシク神乃物トアシク仏トシ

も歎のきそ、神事かと呪唱をひ行ふ。汝を恨  
浪にゆするのねしはきだらか也。女の乞代半也  
まともてそしを今さうりす。縁縁人情  
こりまくたら本ほしく郭みすれらとせ  
あまたてくあ廢までとせかとす。ほがキまとう  
トいきとうと歎のうせん(まよ)ことか半と  
いおは假れぬ遙かとくとくとくとくとくと  
五色のとくとくとくとくとくとくとくとくと  
土はみだ。うちきが家すとくねうねうね

衣をも、衣うて往く夜と朝のとよせ方

神子越後守

アシホウシイクミハシトアラハトスリ相セ万葉詩ニテ  
阜ノ級ヒタツモソシム内セ左ノモウシニ

玉うさあうとまようは、祥うい人まほ  
相うりとうう

かくもじのてこひい  
ソカタリ 精進

やむれり志石川とすうと云。河内石屋星休切皇后

新羅國人誓云也 村と云者

八十隈  
やまとぬ 桜木の通名とぬ也

くじら 海人ともいとがれ也 在万葉三

八十隈  
よもて 田原也 秋田がよもてと云う

山そりて、八十代までと云ふ事也

いはるへまほ、方十好丈物といふ

いります、老ぬ角也

さくま 木のくわくわ  
ちややや 神をねざめくわせ

すみれ衣、尺のばかりやまて、柳衣、ばかりや

もあでとまて、と之峯クテを川よどぎて、亘と物

禁まです、不實ミサハて詔マニ、佐木村サキムラをやうのきと

あり、不可爲

ぬのこまかうすれ、二丈方さうけさうかうのと

よひそのすよを詔マニかうひあうとよう

至是く、ぬくく、物也けきのとあせ

はうちとけ神明のはく蛇ア金をかとよひこ

やう、物をさかねかとおもと云せ

あうじき方十あうじきのめもとどううえ  
あくまえん又万葉物語によくあうじき月を  
くわきてとてては日かとれあへうり  
やそら人八十氏人せうづのとてお近日くは  
とうをそら人ともすはんともうづく角半  
そと不<sup>ト</sup>例そり絆人まとれ多也  
そりうオズノ もと義也

あや冷才せとえい原氏物語原が達肉行の  
かみのりとよもあや東更よりとふや原氏

玉本校少び初うる金毛すとち洞

いまゆく汝物ひいとてまづう早めうそ  
羊のあゆまとよひ汝すよくう越死期せ同ま  
鳥ひま羽羽毛同万葉又卷六一亂競走の度  
同鳥日毛四蛇毛侵而五脚毛夕走毛  
常半とぞう短哥也

月乃狂毛毛の經文也せ同の狂常と云ふと  
人嘗歎といふ虎毛くくとすれば矢射  
て走節ゆ井のうと走くから庄(ア)

まといひて、底とちよふとえりの、うよも  
虎少く、あかとも、あくとも、からくわく、ぢりくを  
かねり、よみやんとアキハ、虎にとある  
もだすり、じらすらまへだるふをゆきば  
白黒二の狂なまじ草の木とかくくじえと  
は、虎と、鳥特の罪はまつたと、鷹と、地獄小  
文字、白虎、白鳳、白日、月、月を、月  
の祥と、とせ

康と仰て馬と云ふ者也。量君乃也。長康と有り。

あそぶよふ人馬うりとくまく村は若人  
ゆうべむらの乱せ牛

天智天皇御代  
えとや林在伊室、おおよそもてぬてぬま  
ま林とすせねハ林のすみはうふ志ん  
よあらはゆすますにのとくみよもとく  
水いわらへてとくしや又花見祝祭也  
子けハ禮拵へとす禮也

おぬが行けよし、志人をあわよしと云ひ  
うすの風行きに化かりの神うそどく

身をうつまへひととてはまだ空とほんとて

丁のすうよすうとどり、後れ折

うちもあまくとどりのうちもうきよしきと  
うじゆかく人を向て湯よまとくせんやと  
こうやあまくかのをうちのねむと人年  
を伝わ折

ぬる里をひる日へもひはずとさへ伝わびて  
ひくらみくえはんまく女髪くとせ  
ぬくまくえはんまくとせ

ほほとづ

袖かげともえもくよしらぐわせ

かりはるゝを女枕ませぬ宿はあくもち  
やまがさく、え、女の代様をうぢれまこづ

移うさくにえ、シキハ越中因幡の明神の祭の日

本と女の男ねねは林宣とすまは祭と

うちも祭と

ほのうへき、近に鹿鳴の明神祭と男の祭

鍋とよもろといづ

ひうち等、後村村日、常陸國康嶋の明神と下神。  
冬の日女をまきう人あまくあはせを若きと  
布の常よかおあらそ神の御あはせをがま  
すすくお男の名がおふる常いとひだるふから  
うりもとどりて神宣うアセムラと女主とま  
く、男の名あら常の神をかかわらずま  
きて男うらかりてまくかみみて  
くみとのさうテキ半也

かみへといづ  
刺利  
ちうととすととをひせらう、國玉工臣をとみ坂  
物也

えとのう、えひ仲ひうすとあう、えうふう、度せ  
えびのきすともひづほよひあはせとが  
所と不身也

たのしまり、えほ物ね云、ノクシのじま  
りと、アラムセをまく、ま虎四万郎  
年那也丈和四百近目、あ人大和吉那

詠乞を常半うれゆも多々一昼夜  
乞は廻はうにねね也といつて、或竟廻り  
多くもあやれねねとがくよらうにてお  
とすせど、うづ候お乞は廻は内也非局而れど  
うづと挂けり。お乞は近代のじの  
はすふようだ。お野のたのじまつりと、  
乞は者野ふじオセくとうと、田もふ多く  
みがしおふととひのあいと、かくみと、  
すれをきうと、うぢや万十ニホウの  
乞き志とすれけめ、あとすよ生て、被、  
わふかとく、万よ水のえよねくうと、神余アシ  
アソヒテ、けじけられけじと、ハ受日火、かう  
はとと、あひせ行ふ、ねく、えうめたと  
ニよ、乞は廻のまう圓ふと、をくぐて、う圓  
うち、まみとととととととととととととと  
とととととととととととととととととととと  
とととととととととととととととととととと  
とととととととととととととととととととと  
とととととととととととととととととととと

平とその下にオホシもあらう。辰の丸  
あらとおまき人まととのうニテ、あらね様  
を又、おもてたてて、うつ伏せうどんでは  
えりゆくもんよけゆきで、モイ音行と云  
ものここと云ふを、ある事じあはれが、キドナム  
御ことてと、あら、本と云ふと、いわて、本店の  
半よとせあり

白(お)れ、毛(け)ぬ、衣(きぬ)ぬ、也(や)、深(ふか)く、  
ぬ(ぬ)ち、下(さ)り、ぞ、え(い)、お、じ、く、も、く、の、水(みず)を、  
ぬ(ぬ)と、ひ、ま、う(う)の、手(て)、と、ひ、ま、う(う)と、手(て)、  
住(す)ぐの、方(ほう)を、人(ひと)、多(多く)う、下(さ)る、社(しゃ)背(せき)、今(いま)、  
月(つき)、行(ゆき)し、神(かみ)、身(み)や、う(う)て、む(む)、ば(ば)、う(う)、か(か)、そ  
北(きた)、と、倭(しづか)、判(ばん)、さ(さ)う、と、水(みず)、と、半(はん)、深(ふか)、  
水(みず)、が、底(そこ)、の、余(あま)、と、よ(よ)、て、ひ(ひ)、う(う)の、余(あま)  
アラ、と、よ(よ)、ひ(ひ)、う(う)の、手(て)、と、ろ(ろ)、く(く)、け(け)、経(き)、て、  
往(あ)ま、社(しゃ)、と、や(や)、と、そ(そ)、あ(あ)、社(しゃ)、井(い)、月(つき)、海(うみ)の、る  
沙(さ)と、す(す)、底(そこ)、と、ま(ま)、れ(れ)、て、と、ま(ま)、じ(じ)、と、ま(ま)

のあそりふしひく月はす小きと  
ちもんとやうべうら文化考云判者子細  
詮定え

△折簡言 小長尺三寸四分六寸重十六斤十五两

天地より小いきくひきあとひくをぬるゝを  
乞ハ神功皇后の新羅とくらむと年ねの事  
笠のうふうとまを行ひありしや乞達さあ  
く色は石とアマニぬとて也廻しう神代  
うかは因といひしや件の不の能あ因故大元

深江村子頃度除油血上ニ衣有也大が一  
尺二寸六分圍一人八寸九分半六分五厘也小  
長一人一寸围一人八寸半十六斤十五两也鷦子  
其義ね半不可勝斗而謂仔人壁乞び二石  
肥あ圓波杵立平おと石而名乞去深江七里  
往來下馬跪拜吉老傳立息長足女余往討  
新羅國特因彦支石杵着袖中加万鎮懷  
され乞子福也万葉立誕生年世人(後)

まうこううみとくすアラシトナシトシタカ、水を濁ル  
を、矢の、とこひんまセテレト、績と化ヒトハ  
いあきセテアシ、又田有トガク、木とシテ  
キムトウセト、糸良、アシマセテ、  
アシタ知セテ、アシモの、トコトコセ、在、百葉十二  
萬、本ほ、梅の、から、て、鶴、本、本、本、本、本、本、  
が、ゆ、と、片、役、と、か、り、え、と、み、ぬ、う、か、り、ま、  
は、初、北、一、萬、葉、よ、多、ア、リ、出、ま、す、ら、こ  
も、り、冬、の、ゆ、き、お、シ、と、う、皆、ハ、か、く、物、の

五  
花  
小  
也

林すくく行まひのうち小まきひととやもを筆  
毛公神龜西年正月よしに筆短奇也とち也  
毛公毛公に有るま川也とすりて毛公  
毛公日節才極樂あらしきよ急天陰雷雨  
毛公下仍文毛公毛公毛公毛公毛公毛公  
毛公毛公毛公毛公毛公毛公毛公

シテ御承りがや才良平少将のまへては  
乞ハ万葉本巣方(アマヤハタケノカミ)ニセキ

アヌムナニキテハトトク但活物持モ也  
ミテシテ後之御氏ニシテ、ナリ但萬葉才又  
六輔作挽短す」と有ム御未ぬ事  
アサヒトモウタシ小ちハナリテ花多キナリ  
アサヒトモウタシ小ちハナリテ花多キナリ

せ、おとこえよあさかたのひもつう  
うきふねにじまほのせはえよせみ  
ケンシゆよめけられひとことあ  
朝あかし下よそくからすいぢわらとせんが  
てとくおはつうじんやを方十むじ四十五

少々ハ因故にておはすり。ちばんうしの金ノ原  
至と、かうり林田彦文支を反也。河村立宴も  
通じて、おほきえ。おせんがまよひはいふ。  
水より奥うへんとて、くろきもの也。唐輔材もす  
三五を代物といやう。小舟が内舟といゆふと  
活足張天皇章御波文ニ時應製也。文左衛  
権諸兄家也。江上御舟。持宴す。とすらう  
内艤装。と松木十乃板や。下りて。とあらえ。江  
主事也。但主射ぬ。との板を。とすらう。とまふ。と

とうにこととひどに四よりもそよぐ  
物あし板と水とものとてやうやうふぢ  
おとすとれまとせ

もよおとすとすとすがおのちくぬけくま  
きじつとすとすとすとすとすとすとすと  
ほよしねうとすとすとすとすとすとすと

はんせんみよーとくわう

かくままで写のばらうとしきとせおおき  
え、おおねあらじゆめよめとまくうとまく

とくわくはとおれをとおのののくとくとく  
ちとえくじうせんみ男がの鳥ア二人会  
男セ、るとくとくとくの件のを、まへ見大和物語  
春子が鶴とまくおとせを村かへるまくわと  
をひきのうとくとくとくとくとくとくとく  
まくわとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとく

うが原や、原れおとがまくわしとくわ浦上原  
者大伴佐挽比古即子、翁波鈴余奉使舊宿

そよ水引を引いてね浦の巣のりうて、あらふ  
誰去永をまわすて魂をうつ渡とく、渡とく、色也  
うふ原の海せじ生ハ被とあらうる、年又五  
毛毛とも心きてお招も肥も圓も圓も詫大者  
~~毛~~小廣圓押猪天皇~~セ~~、文体狂手彦連  
神圓と毛の毛と百濟圓とすんざめ小  
波とゆくは村よりはまき則藤原村にて非  
子ノ持へり、まちうら人よ勝あり、がく日後  
と毛くねわふ婦別と、かくしく遁てく、

ゆくまく河の傍河よりうす扶手度連  
牛と毛特牛~~ア~~罪子山よりく被とあらうむ移  
仍じ毛づ山に毛一移也

まと毛ね浦の毛と毛このことの圓をあまし女<sup>ヲ</sup>  
毛ひ山と懷良<sup>ア</sup>ね浦の毛と毛の道邊毛  
つ毛毛をうあううかからずれうちは毛の  
里つ毛の家あううと毛うくい林竹と  
よ女若咲く毛く毛く毛約毛毛毛毛毛毛毛毛  
毛く毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

ねよれりとうとうを三つの圓にそらふの  
まふせをせ、化まふとくすりすとく常葉  
すう圓せがた、浦鴻カマツカすまわニトシト  
シニトモシ(き物とだらば天社)とよやこ  
雄畧天皇御うよ浦鴻カマツカすまわニトシト  
えはよ約とくみくせ日迄家ヒタチヤウガ  
お小神女ミコトハみくせの圓よもはと  
計のやくづらくとくすりすて老を死シテ  
そちにかせとゆりき行カミハシとこなでて

父アメノとくまもゆとがるんとされ、神女  
ゆくとくいひれとくかと、翁カミハシとくい  
男古カミハシとアラヌミアアラヌミアとカミハシと  
有アリと毛ウツとくとび若カミハシとすスとあらう白雲  
をくこくとくみくせだらうとまくと  
忽ハムと發ハタケとく年ハツとて余ハタケとまくと  
は浦カマツカす、蓬萊カマツカよそとあてとへ  
らむやとくらうとく下シタくよけくと通  
万葉カミハシのすれそしがくみくせ

うりえぬ余にあまひをきたの家うちもくまくわき  
天平七年元理領とあまて坂と申す者有る  
せば理領とあまて新羅國りまくわき  
主領とがてして朝より坐り太使様今  
家よりうちを被ふまし村よりお色石河  
余物依解茶本終を向温泉但不禽衣  
平女狂うまで化しき也

アツハモヤマミトエスラ皆人の名とくもやマキス

因大に陳足の安見と云う御とえてよき

ああふをやけ行つてましゆあづらひこす

乞ひ若未すとあらまう浦のじとく門内禁

行多色だとモアオ一二人少く経て仍く逃

候ニす、行ふよきし但としのちめまく

アモラムく候はうねうとソラゲ候

た角との事とくれむ新よアシマツリツツ候

が、あまくづきのれどもと乞、家が坂上

大猿よとぞう短手のとさへ併短哥ア

たまもくすすりとまもうちゆもあそひよせ  
衣よみゆきあまくとくらむれのむりを  
うくいはまのまとかまくに衣のゆりと  
とうへ用ひうるやが内れふ鳥室あ伸  
正年はまわとくらむくおれ多也  
けのじとじきくとくらむくとくらむく  
ば敵じるをきくとくらむくまくも  
あくとくとくらむくとくらむくまく  
仰かくとくらむくとくらむくまく

正終つとのまだるくとくらむくを  
にくわくわく也

まちもくすすりとまもうちゆもあそひよせ  
衣よみゆきあまくとくらむれのむりを  
うくいはまのまとかまくに衣のゆりと  
とうへ用ひうるやが内れふ鳥室あ伸  
正年はまわとくらむくおれ多也  
けのじとじきくとくらむくとくらむく  
ば敵じるをきくとくらむくまくも  
あくとくとくらむくとくらむくまく  
仰かくとくらむくとくらむくまく

モトニテアヌル神モトニテアヌルハコノミコト  
日暮丸六天照大神御祭事わ余とあを原中岡  
アリヨテアトモレバ内四ノミスノト堂火が  
至く神モトシ蠍群和神多ニスミヘイ内  
スモミシテアトモレバ内四ノミスノト堂火  
シテ六月祓とする也衣牧需とソハシ年  
ナリミシニハ蠍也草木ニシムクシムシ  
少ニハム祓とソハシ内四ノミスノト堂火  
詣タヨク人取ハシム神モウカガウ行ヒテ  
ヨリ入セ也若の根源也

シテ天穗耳すモ神像モトニテアヌル四  
之根本アトマツノ木カオシタルモレソナリ  
若煙火アトモスムシテアトモ五月蠍之安席  
ヨリ入セ也若の根源也

アキハラノアツシル井のあそキハト神ヲモシテ  
万葉十之萬葛城王遣陸奥國ノ前司祐  
佐緒忌異思特王云不悦怒久引而往  
設飲饌不屑宴坐於庭有女童女風流  
狼子た手捧觴不モわ承聲く王膝旁詠

ばあ余乃王之解悅樂欣終じてす遠去  
百葉石はえ萬葉王情経往來と長稿送え  
乞也

外れりかくよきうとくとくとくとくとくとく  
ばあばあくらえかまひ不需をまちうとくとく  
よひ毛をさすれを併拂せと恨くとくとく  
山よきよしといつよひに大に親絶後大  
わゆやうはは四へ行くやゑとをゆげられ  
う耶かねもとく爲め方とよりぬせええ

とく爲め方とみえいはとも重せりうとくとく  
耶かねもとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
近年道真かとむりうれうのとようういん  
そのとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
玉のこあや、さきの秋の浪打、お葉小聲

乞は寛平の序付よとくとくとくとくとくとく  
かとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
おとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

かうもそよんをはくとまくわが衆人の中ふ  
とくらうとくらむもこかうといふ事す也  
お前よおうひゆあよやうゆをくようく  
但くちのひとへえが前と風俗のちうだま  
されのこうとせよとくちう、やさうが  
がきくわうとくちうせぬよううがくう  
みくづくせにほ二種を不審

初のうれいせうとくちうせぬよううがくう  
じうい天平寶字二年正月三日行

子王と令仰内裏と東宮恒而即賜玉策  
肆宴于時内仰<sub>屢</sub>有原初に奉勅宣諸主経  
等及堪任意作す、賦詩仍應詔旨各陳之該  
化也右亦中弁大伴宿禰家均作依大差政  
不懇奏志也信くひえひよも初のうれい  
されば余もうとくどう也而後<sub>口</sub>傳玉<sub>口</sub>き  
泣不需春<sub>トド</sub>オ小子日ねとし具て幕末  
行うてしだすのうれいの日が、ニが、金と  
くやとくう又、物とがしゆくよ玉策と

火にあはれよそりあはれりととかおさんえ  
わどづくはれよの草席と引てうちまへて  
火の下に火といへて玉草席とよる  
又は草席とよる火といへりとよらうとひあへいへ  
はまとうともあはす只ねひともやふ  
火を引て火えうち半をう候事の  
序息の駄人うけちひがひはねよまへ  
おうちまへ下ろんてれの強よ不審なへじ  
そひまみしめあく(おまへ)火をばく

はう稱と人詠す僻事せ候なりて是故  
古方と、有りやむに候物候がびと多かの  
上人材といひ子の立内許られが一と度し  
あらゆる道よびてうれしにさるれ矣て  
乞がの入ゆる也の萬れらうまとあらじ  
そらあらひ一說義和帝萬葉より又とねをせ  
新詩いが萬葉と云といつて一說又ハ一幸萬葉  
云といつて、又萬葉と云い義和帝萬葉又一幸  
萬葉云、又萬葉万葉と云い候教說也

みうきさねひそのまうなといてすこみくね  
天下ね(乞)を候物の乞せ候がひうじと

よじとえく

河原うとのふそりとくられ、よふ、とせとすすいだ  
乞葉えりあは友神樂とよすや河の上  
そな神示として祈せ候れ、ひえぬうと  
いすとを育情みのかうせとのふとひま  
みめせを亥さう人の祈よすわとよす  
山見あらとてちよがみすよるみとせ候  
ひがみのま候れ、いゆりひよふかくらす

つ、首ごそりの圓うし山鳥とくもとくと  
ひもとくあくとおくの恋としきと、ア・門  
乞とおとく仰行ふよ更よらとくあまめ、茶  
あらよげ山鳥とみせをもぐんと辰よま  
東と仰らんき、南くのまとくにとくと  
やま行きすよ人を女け、もぐくみ生とく  
すあうととくあうとくとくとくとくとくとく

すとえり尾といひて後の内より

ゆき先よりて山女御后より行うがる者

神行かおりか

見

志計

高貴草

とまうこう下級にてまわらがれ志二番より  
乞~~家~~翁~~翁~~歸~~り~~坂上家大娘~~大娘~~贈~~す~~に難後~~難後~~粧~~粧~~  
は~~は~~金相~~す~~往來~~し~~うとう~~う~~たと~~と~~、~~と~~終~~く~~い~~く~~さ  
女~~め~~ああ~~あ~~の~~の~~せ~~せ~~万葉~~萬葉~~相~~す~~うと~~と~~、~~と~~う~~う~~を~~を~~す~~す~~  
夫~~め~~んと~~と~~も~~も~~え~~え~~三~~三~~禮~~禮~~と~~と~~、~~と~~う~~う~~せ~~せ~~子~~子~~細~~細~~  
候~~お~~お~~お~~よ~~よ~~て~~て~~夫~~め~~人~~人~~親~~親~~子~~子~~二人~~二~~り~~り~~多~~多~~秋~~秋~~實~~實~~

うちは未~~な~~か~~か~~じ年~~年~~と~~と~~る~~る~~と~~と~~と~~と~~年~~年~~  
の~~の~~音~~音~~を~~を~~う~~う~~と~~と~~そ~~そ~~いふ~~いふ~~き~~き~~を~~を~~う~~う~~と~~と~~音~~音~~  
色~~いろ~~を~~を~~う~~う~~ら~~ら~~と~~と~~ね~~ね~~た~~た~~く~~く~~と~~と~~う~~う~~と~~と~~音~~音~~  
川~~か~~源~~源~~と~~と~~う~~う~~て~~て~~村~~むら~~か~~か~~よ~~よ~~お~~お~~行~~く~~、~~オ~~  
え~~え~~親~~お~~母~~お~~し~~し~~じ~~じ~~て~~て~~い~~い~~ん~~ん~~ち~~ち~~よ~~よ~~い~~い~~だ~~だ~~か~~か~~  
ち~~ち~~う~~う~~よ~~よ~~年~~年~~で~~で~~り~~り~~て~~て~~、~~と~~み~~み~~を~~を~~あ~~あ~~き~~き~~う~~う~~く~~く~~と~~と~~  
と~~と~~か~~か~~て~~て~~か~~か~~よ~~よ~~が~~が~~く~~く~~す~~す~~と~~と~~あ~~あ~~て~~て~~、~~と~~く~~く~~ふ~~ふ~~く~~く~~と~~と~~  
く~~く~~う~~う~~よ~~よ~~て~~て~~、~~と~~う~~う~~こ~~こ~~し~~し~~る~~る~~舞~~舞~~す~~す~~と~~と~~く~~く~~す~~す~~月~~月~~

天とて首まとその顔を身よりお擣  
まほすに仕え。例の顔(まほ)とまうしゑ  
とほからぬく具(ぐわ)と正(まこと)も  
うとうとぞくびんとまういよとそもと  
日と夜とあして、村(むら)とまういよと  
ふさんと橋(はし)とまういよとまういよと  
日と夜とあして、山(やま)のうち  
とあして、おひやうの親(おやぢ)の御(ご)鬼(き)  
おおまくまくまくまくまくまくまくまく

恐(おそ)りき。うちの夫(めのめ)の親(おやぢ)。  
月とある生(おき)とかもうまづ。是(これ)の月、肉(にく)  
がかりゆかくつゝとまどまどくとせす  
えりゆきとまくと橋(はし)とまくとえり  
く行(ゆき)てあり。しりづくまくまく  
鬼(き)のまくらとまくらと物(もの)をもじつま  
育(いく)らすとまくらと人(ひと)をもじつま  
とすとまくらとじくとまくらとまくらとまくら  
のまくらとまくらとまくらとまくらとまくら

寒光と、うむ、おまえは、櫛を手に  
おもてくまわし、櫛ともまやとう  
かくじと、うむ、おまえは、まゆい

よき、おまえが、おまえが、せやる、おまえが、  
おがくの、おくさりと、おはす、おまえが、  
おじと、おじと、おじと、おじと、おじと、  
うと、おと、おと、おと、おと、おと、  
おと、おと、おと、おと、おと、おと、

さうふねん、おみけの、おと、おと、おと、

かひや、おと、おと、おと、おと、おと、  
おと、おと、おと、おと、おと、  
おと、おと、おと、おと、おと、おと、

甲斐國の山ややすらもあふとまへき  
まくはりこりぬまうとひれり  
あざるとゆくへるまうとひれり  
とてつるおもてうとひれり

トニ、まくはりうとひれりとアラセ  
れきほりとひれりとアレテリとカタシ  
四風使一役ミツガクシキとひれりとアラセ  
ボシとまくはりとひれりとアラセ

毛糸衣とまくはりとひれりとアラセ  
とひとひよが高きとひとひよが高きと  
ソハセ計のりゆ神猿伏とかくらばる  
とくらばる也と周縁と細筋石代勧  
さきとあゆのさとあゆのさとあゆのさと  
洞穴月二年とあゆのさとあゆのさと

いとあゆのさとあゆのさとあゆのさと  
あくえとととととととととととととと  
かくとあくとあくとあくとあくとあく

七八年八九月と少く也差違ひ有り

とが年、後はとくに也。先覺の說  
伊勢守、御内侍うち朝臣も皆、おもむとおもむきを爲す  
是が、二月朔日、店あらわら、おもむきと御く  
敏行うどあらわら、この衣、方のゆうう  
よよその代よえうふそ也。更に、子細く、或様  
をかほる、いづれ、例不、あまとも、かにて、傍證  
只、有能く、本、今春、武帝崩五年、二月朔日  
、店あらわら、夜玉、奉衣、おりりて、店とぞ、  
六土の、行小衣、おもむて、陽とひ、帝基、あらわら  
行小衣、とぞ、も、此、ア

紙小衣と見て此也ア  
雖はとて極らかに在れば月とそら小ち  
内の空をひかとソシ海を十日より滿也故ニ  
づく乞抱朴子宵精生水を宵盃而渴渴  
太主が大主とてもいよテシハシの文  
あやすチリ主事とどもしるべつまア不<sup>レ</sup>遠  
ぢめきり人との御小石、持めて女を乞  
乞はう庭と之物候のキニアモリ不<sup>レ</sup>する  
トキハ近頃あり前向ぬあり夫軍ア

かくのまへりとす  
五方から行く  
あらあらぐるきせふとて木立高めに山城と人物づれ  
者せども根は山城より多く多く人どもさう

まうらうすとては、のけられ、おもせ、物思  
と書玉畫張衡馬陶と云ふ人書といひく山  
トとては一人が筆引す。一人が病、一人が死を爲  
子のハ酒と薬をうりうる。病多きが物と冷え  
死や病と不食といふ事とて云ふ事

をくまひどり也左人祝禰御事通よ  
習教も山まで月れあまうもと山うまえ  
毛がね月げまて朝の月也あひふわも  
あひ下もとよより山うもとすももの  
川也くもととす月も月も月もと左人を  
すまもと山す月も月也左月月月也  
一云作紫振作紫母二神生日神也字先る  
とくもと四引てうじゆけい叶はむひう  
すまきとがねあめくみくらとすもとすも  
あくらくも皮のくすりとすもとすも  
月朴うづくも毛月小伎うはててえあ  
よとくら文書と三神ありうとおさり人等子  
うんと前左もととてます候ともゑま  
刈化大朴毛日神とおもねと候とも  
候毛うづ神と月神と月うづ神

不<sup>レ</sup>やもじてすもとのまきと日神あひ家<sup>ミ</sup>も  
ひ<sup>ミ</sup>はの圓を酒也お風をとい殊の海のれ  
あれ玉多と云ひと左人祝也あまうもと

よての事や日のあまが家もまき義  
多良山やまはあからとうとそら  
山はにシ附とからますやまは流信  
夕陽映河からとすとせれの西をう  
せふそじりうとひ床はあらし初  
ねのまく月はうねすちとすとやまはみか  
えぐわあくまもりくもんとくとそねの  
ふくうめぬとゆくうくらめいようせ  
あまびて遠うと花更花也

秋れ月のけやうひうとうとれどもうち  
月のうへ來れまへえとれのすまう  
そえらせとく月の桂とよすと花也  
色名荒立月中河上有桂高丈百丈  
トヨ獨の人玉樹とおう桂吳名剛文西河斧  
十六也とゆいえくらすと、あらきと  
かが男と云本、か曲、立月中桂ありふうい  
妻岸經立圓浮槎地と圓浮樹と一名波賀  
又一名龍樹立八方に里樹陰月中琴

説ふれ事はからず、されど月の中は桂が見  
ゆるを也

桂月はうそてうそと云ふてあとゆゑや又あるも  
まの庄いあせあひづきまがむれえ本代主  
神海中よりま奈葉難て化くらむちとす  
月きよみねとうかがく見ゆるてもなすといま  
神のうすとくねよとすらば鶴音は絶魏帝ホイ  
月明星稀鷺鵠南光繞樹三通何故て候ひと  
鳴うるをうらう月朝のとくすら門とまく

山か神火天稚彦と使じて、更原中  
回邪神鬼と拂はぬりとすと即ち回と  
女子下姫非とも仍て半トモくばは高靈

靈尊あらそて、三名難とほんす缺あらそ  
いえ六門をあらゆる湯津行行、  
あまえよかて、三浪丸もまふとあら物たまご、  
かでこそ浪とひきやたひきの間のあら今く、  
すれゆる人車、をとおまつりとす、半

重きよの物よのもの、とよひとえい也



うりの見もひとのまくとくとふれし  
是れが天地をくわへて泥湯のまくがくにゆる  
すそでゆゆゆあらかみの圓のうゑのと山  
山名付くをえふに山ありと云ふ日東紀  
問答抄からうそい山のうちかいたてを  
引候せ仍是りの山と云ひ又は羅摩圓山  
仙人と云ひて額の一の角せくがせめ  
ありて重量と峰とて又中通とゆうらぬ峰  
山の勢あたはせくと云ひてよどりてを  
もいたといがくらやせ村と山と云ひ鳥帽を  
きつてゆく鳥帽をすすむをすく下よ  
おうぞくせ也  
村宿がてゆくとあくびあくまをねる内  
八角縁の者大和國よりうり写らんとぞひく  
えく女がらとくねまと恨まれては但れ  
承るべからずをされ主教人にゆき

御ごくひえで行とまきいもくあめうらす  
をよし独りすく見えぬとちくがてぬけ角  
てわらよちいきうちみうとくゆうてうか  
れきてゆくとあいにま東又来くもくす  
べづ理也えきく人内と恥ほくがまなうて  
ゆくもくもくじ事とく麻のまくらと  
かまのとく小内にそのとくとくと  
幼人被ふ三帰明神の御真名の中よ  
ま麻の残三さすあくわいとまくはまく  
櫛のほさくかくとまくすくやくじやの用  
あくよいたき人せよとを圓のあととせ  
陸奥ちむ羽の中よ約がく山あく本さく  
業ああくゆきゑやとくはいとくりと  
たきうれいとくやくとくうりじやく  
かくふふにふあ用の者也在む羽方

あはのほきかまふきすくらひやの開  
あふとひたきめんせふを圓のあとせ  
陸奥ち翁の中よひがくあら木とく  
美とあくゆきゑやとくひのひそりと  
たうれすじやくとくとくとくとく  
か山ふにふあ開のをせ在出羽方

102  
630  
5  
4



